



国会で障害者自立法の成立を訴えるウェンディさんと仲間たち。現在の政権は、障害者の自立推進に協力的だ

自立法の制定めざし 障害者自ら300キロ走破

2016年6月30日は、コスタリカの障害者にとって記念すべき日となった。この日の夕方、障害者自立法が国会で成立したのだ。同法案の採択の裏には、社会での認知を高めるために300キロ近くを自分たちの力で踏破した3人の障害者の熱意があった。

そのうちの一人、ウェンディ・バラテスさんは、2歳のときに難病の筋ジストロフィーを発症し、車椅子で生活するようになった。高校は卒業したが、大学に行くことはできなかったため、家族と一緒に生活していたという。「お母さんと一緒に生活するから、何も困らないわ」。コスタリカの多くの障害



国際協力の担い手たち

コスタリカを代表する日刊紙「ラ・ナシオン」などが取り上げたことで、障害者の自立への訴えは大きく注目された



ペレスセレドンに作られた自立生活センター「モルフ」の活動の様子

特定非営利活動法人 メインストリーム協会

「普通に生きる」が当たり前の社会へ

障害者の自立した日常生活を支えるための公的介助制度。コスタリカでは、この制度の制定が遅れ、多くの障害者が家族に頼る生活を選んでいて。状況を変えるきっかけとなったのは、日本で障害者の自立生活に取り組む特定非営利活動法人メインストリーム協会の活動だ。



者同様、そう考えていた彼女の生き方を変えたのは、2009年に来日した際の研修で出会ったメインストリーム協会の活動だった。

開いたのだ。過酷な炎天下、日差しをさえぎるものがない道を歩き続ける日もあったという今回の挑戦。マスコミの注目が集まり、首都サン・ホセに到着したときは行きかう車がクラクションを鳴らして応援し、道行く人々も水や果物などを提供して歓迎してくれたという。この活動の成果もあり、障害者自立法は無事、成立する運びとなった。

悲壮な闘いではなく 前向きに人生を楽しむ

これまでコスタリカには公的介助制度がなく、障害者は家族やメイドなどに頼って生活せざるを得ないことが多かった。「国会でも、以前から法改正が必要との認識はあったのですが、他の法案に比べて優先順位が低いために、審議が先送りされ続けてきました」とウェンディさんは話す。「そこで、多くの人にこの法案に注目してもらうために、マスコミやSNSを活用したキャンペーンを展開することにしたのです。その時、ヒントになったのは、日本で教えてもらった、TRYという活動でした」

兵庫県で障害者の自立センターを運営するメインストリーム協会は、1999年にアジア6カ国から障害者の研修受け入れを開始。研修で終わらせるのではなく、各国での自立活動の継続的な支援を手掛けてきた。ネパールで自立センター設立のためのセミナーを開催したときにJICAとのつながりが生まれ、2008年からは中米各国の障害者の訪日研修を受け入れ、13年までに60人が来日した。

研修の中で伝えているのが、アメリカなどを中心に広がってきた新しい自立の考え方。自分の生き方を自分で決定する「自己決定」こそが自立の根幹で、そのために介助者の力を借りるというものだ。訪日研修では、障害者がメインストリーム協会の活動を見て、自立の考え方を学んでいく。

ウェンディさんは帰国後、コスタリカで地元の仲間たちと自立生活の実現



メインストリーム協会で行われる研修を受ける参加者たち。この日は全体会議が行われていた



日本の障害者支援団体の全国会議で、コスタリカの活動を報告するウェンディさん

に向けて取り組んできた。12年にはメインストリーム協会の協力で南部のベレスセレドンに障害者のための自立生活センター「モルフ」が設立され、ウェンディさんもこのセンターで仲間たちと生活を始めた。

ウェンディさんを後押ししてくれたのが、研修などに常同行し、彼女をずっと支えてくれた母のヤミレスさんだ。「ある晩、キッチンで両親が話しているのを聞きました。私が家族と離れて暮らすのを心配する父に対して、母が『あの子を愛して、尊重しているからこそ、出て行くことを認めてあげなければ』と答えていたのです」

現在、センターは日本の支援で運営されているが、いずれはコスタリカの人たちだけで運営していくことになる。障害者自立法は、そのための基盤となるはずだ。「コスタリカは比較的治安も

よく、経済的余裕もあり、何より教育が充実しています。人権を守るという意識が高く、障害者の自立センターも増えてきていますが、バリアフリーに関して地域格差が大きく、改善が必要です」と廉田さんは話す。

障害者自立法では、介助者の資格などについて、障害者団体の意見も反映された。障害者自身の意見が法案に取り入れられた事は、自立生活を目指すに当たって大きな成果だ。ウェンディさんも法学部で法律を学び、将来は弁護士として障害者の法律支援をしたいという。

「廉田さんは、怖がっていないで、楽しみながらチャレンジしなさい」と勇気付けてくれました」と振り返るウェンディさん。障害者が自分の生き方を自分で決められる社会に向けて、これからも前向きなチャレンジの毎日だ。